第7章

個人と全体の二項対立をどう超えるか

- アフリカ経済論再構築の一助として -

高橋 基樹

はじめに：アフリカ経済論の危機から再構築へ

「アフリカ経済論の再構築」という本研究会のテーマには、少なくとも2つの重要な含意がある、そう筆者は理解している。

ひとつは、アフリカというまとまり（本研究会の場合はサハラ以南のアフリカであるが）を対象とした経済論という研究分野が成り立ちえる、ということである。サハラ以南のアフリカ（以下単にアフリカ）には先進国に匹敵する科学技術を有する南アフリカもあれば、人的資源の開発水準が世界最低の国々もある。ボツワナ、モーリシャス、あるいは赤道ギニアのような世界最高レベルの高度経済成長を続けている国々もあれば、多くの国々では経済成長率が人口増加率を下回り、平均的国民は年々貧しくなっている。要するに、アフリカという地域の内部にはきわめて大きな多様性がある。にもかかわらず、アフリカをひとつの、ないし共通の学問的問題をはらんだ対象として捉えようとするアプローチが可能である、あるいは意義がある、という想定がそこにある。その想定は言い換えればアフリカが他の諸社会や地域（例えば、先進国あるいはアジア）から区別される固有性を持ったものである（または固有性を持つと想定することが検証に値することである）ということであろう。

もうひとつの含意は考え方によってはたいへん深刻なものである。すなわち、上で述べたような「アフリカ経済論」という研究分野が「再構築」を必要とするものだという事である。それはこの研究分野が現在何らかの危機に直面しているということの意味を意味していよう。

ひとまとまりとしてのアフリカの固有性への接近と、アフリカ経済論の危機とは密接なつながりがあると考えられる。アフリカ経済論の現在の危機は、アフリカという研究対象の固有性を探ろうとするアプローチの意義を相対化（場合によっては無意味化）しようとする特定の知的傾向によってもたらされたものだからである。

マルクス経済学がそうであったように、経済学は一般的に自己を、何らかの意味で普遍的な論理体系にしようとする傾向を持つ。前世紀の後半に展開された経済学諸流の中で、そのような普遍化への最も強い志向を持ち、しかも隣接する他の社会科学に最も大きな影響を及ぼしてきたのが、新古典派経済学およびその後継者であると言って間違いはないだろう。新古典派経済学は個々の主体の経済的合理性という仮定から出発し（すなわち方法論的个人主義の立場に拠って）、高度に洗練された数理的経済分析の理論体系を構築することを通じて経済学の主流派としての地位を得た。

ここでのアフリカ経済論にとっての深刻な問題は、経済学の一般理論、とりわけ新古典派経済学との関係をどのように考えるかにある。およそ全ての社会科学の使命が、対象を理論的に説明することを含んでいることに異論は少ないだろう。だが、アフリカ経済論をはじめとする現実を直接に対象とする学問分野（他の地域研究、政策科学、歴史分析など）にとって、自己の役割が普遍的経済学の単なる応用であるのか、それとも何らかの意味でより積極的な、かつ自立的なものなのかについては様々な考え方があるだろう。言い換えれば、アフリカ経済の複雑な現実は、「合理的経済人」および経済学一般理論のその他の基本因子の組み合わせによって説明できると考えるのか、それともアフリカ地域研究により固有の、積極的な役割が認められるべきなのか。

思うにアフリカ経済論の危機は、こうした方法論の根本部分にかかわっている。本稿では、アフリカの複雑で具体的な現実に向かい合う経済研究の立場はどのようなものと考えべきなのかを、特に新古典派経済学の土台をなす方法論的個人主義の拡大によってもたらされた経済学方法論上の対立と問題点を明らかにした上で論じてみようとするものである。

以下第1節では、方法論的個人主義とその基本因子である合理的経済人について概観し、このアプローチの中のいくつかの立場、とりわけ合理的経済人を事後的に検証すればよい理念型と捉える主流派の考え方について述べる。

第2節では、主流派経済学と異なる立場から、途上国及びアフリカにおける人間像に関連して展開された石川滋の資源配分論、赤羽裕の人間類型論、ヒデーの「情の経済」論などに注目し、主流派で捉えることの難しい途上国及びアフリカの問題群を汲み上げることを試みる。

第3節では、主流派経済学の延長上にある新制度派経済史論の代表的論者であるダグラス・ノースの議論に注目し、主流派経済学の枠を超えることによってもたらされる個人主義的アプローチと全体主義的アプローチの方法論上の二項対立の意義と問題点について明らかにする。

第4節では、前節までの議論を踏まえて主流派経済学の問題点を乗り越えるためのアフリカ経済論のあるべきアプローチについて試論的な提案を行う。

そして最後に残された研究の課題について触れ、今後の議論の材料を提供する。